

しらかべ

2022年3月18日 人権・同和教育部発行



今冬は例年以上の寒さと大雪のニュースの多い冬でした。また新型コロナの感染拡大が今も続いています。本当に一体いつまで続くのか...と思いましたが、今日はもう一つ、この「一体いつまで...」という話をします。ちょうど100年前の1922年(大正11年)3月3日に全国水平社創立大会が京都で開かれました。差別の厳しかったこの時代に被差別部落の人々が立ち上がりました。この時「人の世に熱あれ、人間に光あれ。」と謳いあげた水平社宣言が採択されました。この宣言は日本で初めての人権宣言と言われますが、その時から100年経ちました。しかしこの宣言文で訴えたようなことが昔のことになるような、部落差別の解消が実現した時代になっているかといえば、残念ながらそのようにはなっていません。

この半世紀前の1871年(明治4年)、被差別身分を廃止する「解放令」が出されました。そのすぐ後、奈良県のある村で大庄屋が被差別部落の人たちを集めて、「解放令はお上の都合で五万日の日延べ(延期)になった」と告げました。これは被差別部落の人々を再び押さえ込むと共に、解放令に反対する農民を納得させるための大きなウソでした。この五万日という日を解放令発布の日から数えると、五万日目は136年経った2008年9月におとずれます。その日は10年以上前に過ぎました。そして1922年に出された水平社宣言に込められた被差別部落解放の願いも、100年たった今も叶っていません。「一体いつまで...」ということがここにもあるのです。

しかし、この社会の中にある部落問題をはじめさまざまな差別は、自分が待っていれば誰かがなくしてくれるものではありません。自分が差別をしなければそれでいいというものでもありません。この問題の解決に難しさを感じるかもしれませんが、私たち一人ひとりにできることとして何があるのか...。少しずつでも考えて実践や行動をするしかありません。大人が子どもたちの前で差別を許さないという姿勢を見せるというのも一つの実践です。差別に直面した時に「それはおかしい」と言うのも、大きな行動だと思います。

学校での人権・同和教育は、そのような実践や行動をどのようにしていくのかを考える場であり、出発点になりたいと考えています。学校では人権・同和教育HRや人権講演会などの行事を通して、生徒たちがこの問題について一生懸命考えていることが伝わってきます。また保護者の皆様からの「しらかべ」の返信を読ませていただくと、保護者の皆様がお子様と一緒に話したり考えてくださったりしていることがとてもよく伝わってきます。今後とも「しらかべ」とお子様とのお話との両方で本校の人権・同和教育について知っていただき、ご意見や話題をご提供いただければ幸いです。

今号では、今学期に実施した1年生対象の人権講演会と、1・2年生の人権・同和教育LHRの取組、そして2学期の「しらかべ」を読んだ後にいただいた、保護者の皆様からの返信についてお伝えします。

★ 1年生 人権講演会 廣瀬 悠さん 順子さん 「二人で乗り越えた障がいとパラリンピックの壁」

今年も1年生の人権講演会を、パラ五輪東京大会にご夫婦で参加した廣瀬悠さん、順子さんご夫妻(愛媛県在住)を講師に、昨年同様オンラインで行いました。廣瀬さんご夫妻は、高校生や大学生の時に視力が低下して弱視となりましたが、それまで行ってきた柔道を続け、パラ五輪に出場するまでになりました。講演ではパラ五輪東京大会出場体験談やそれまでの練習や生活を送る上でのご苦労、障がい者を取り巻く社会の課題についてお話しくださいました。後半は、生徒から廣瀬さんご夫妻への質疑応答(写真)の時間としましたが、オンラインと思えないほどの、充実したやりとりが行われました。

《生徒の感想より》 ▲今までは知らなかった健常者の柔道と障がい者の柔道の違いを知ることができ、今後、パラリンピックでの柔道競技を観戦する際には様々な視点から観戦してみたいです。
▲日本と海外の(障がい者に対する)対応の違いについて聞いた時、私はとても衝撃を受けました。日本人は優しい人が多く、障がいがあってもなくても住みやすいと思っていたからです。▲廣瀬さんご夫婦のようにお互いで助け合って今を精一杯生きている人は私から見るととてもキラキラして見えます。



★ 1年生 人権・同和教育LHR 「性の多様性を考えよう」

1年生3学期のLHRでは、DVD「りんごの色～LGBTを知っていますか?～」を視聴し、性的マイノリティをめぐる人権問題についてグループで話し合いました。DVDは、演劇部に所属する一人の高校生が、様々な出来事を通して「性」のあり方を考え、「りんごの色」がよく見ると様々な色から成っているように、私たち人も見た目や性格などすべて違って当たり前だということに気付いていくという物語でした。授業を通して、自分の中に知らないうちに根付いていた考えに気付かされたり、今後の生き方について考え直したりする姿が多く見られました。また、グループでも熱心に意見交換ができ、すべての人が自分らしい生活を送ることができる環境や社会をつくるために、自分たちにできることについて考え、今後の人権意識につながるとても貴重な時間となりました。

《生徒の感想より》 ▲DVDを見て、LGBTQの人とそうでない人で、自分も知らないうちに線引きを
してしまっていたことに気付きました。▲ビデオを見て、10の人がいたら、10人が違う顔をしているし、
声も、性格も、性のあり方も違って当たり前なのだと思います。▲この世界には色んな人がいて、それぞ
れが違った色であるからこそ、個性というものが生まれ、色鮮やかなキャンパス（世界）になっているのだ
と思います。▲LGBTの人たちだけが周りとは違うのではなく、私たち全員がそれぞれ違った「性」に対す
る考えや意見を持ち、生活しているということを入れて、もう少し自分の言動に責任をもっていくべき
だと感じました。▲人として、相手も自分も大切にしていきたいと思いました。▲相手に「らしさ」を求め
るような行動や発言をしないように気をつけ、もし身近に悩んでいる人がいたら相談できる、打ち明けやす
い人でありたいと思いました。

★ 2年生 人権・同和教育LHR 「部落の歴史Ⅱ ～高松差別裁判事件から学ぶ～」

2年生3学期のLHRでは、1933年に起こった高松差別裁判事件を教材に、同和問題の歴史について学
習しました。この事件は、被差別部落出身の若い男性が女性と知り合い、結婚を約束して一緒に生活をする
ようになったことに始まります。しかし女性の父親が自分の娘が誘拐されたと警察に通報し、男性が逮捕さ
れました。裁判の結果、男性に対して差別的な有罪判決が下されました。その後、この判決を機に水平社を中心とした全国的な抗議運動が展開され、戦後、
政府はこの裁判について謝罪しました。そして、後に憲法の人権に関する条文にも影響を与えました。LHRではこの裁判がどのような社会的な背景のもと
で行われたのか、今の自分たちならどのような判決を下すかなどについて、考
えながら進めていきました。



《生徒の感想より》 ▲法律を学んだ裁判長や検事でさえも、差別心を持って国家権力をふるおうとしていた
のはとても恐ろしいことだと思います。物事の本質を見抜き、周りの誰も疑問に思っていなくても「それは
おかしい」と言える人になりたいです。▲偏見により、自由を奪われ、勝手に悪人扱いされるような社会はお
かしいと思いました。▲今、こういった日本があるのも先人たちの差別を無くそうとしてきた努力があるから
だと思います▲周囲に流されたり、理解しようとしなかったりしたら、この先差別は無くならないと思いま
した。だから、人権学習にもっと真剣に取り組んでいきたいです。▲人を判断することは、すごく上か
ら目線で偉そうに見えるけど、裁判のような大きなものではなく、自分の身近にある日常の中で、正しいこと
や善いこと、間違っていることや悪いことの判断をするためには、もっとよく勉強して、沢山の事を知る事
が大切だと思った。

★ 2学期「しらかべ」の返信より たくさんのご感想をありがとうございます。

▲人間はみんな自分と同じではないことと、その違いをお互いに理解する、理解しようとするのが差別の
解消につながると思います。▲水平社は、同情するのではなく人としての尊敬を求めて立ち上がった人たちが
結成したものであると、昔学生だった頃に習った記憶があります。今でも差別について学んでいるのは、
なかなかなくなっていない現状があるのだなと思いました▲数年前に大島青松園に行く機会があり、入所者
や職員の方から話を聞くことができ、とてもひどい生活や差別、偏見を受けていたことに心が痛みました。
1年生の生徒さんの感想で「自分の価値観だけで世界を見るのではなく、視野を広げ、理解しようと努力す
ることが大切だと思った」本当にその通りだと思います。▲“生きづらい世の中”この言葉を耳にすること
があります。誰しもが“自分らしく”生きていくことができるようにするために必要なことは何か、多方面
から考えていけたらと思いました。▲人権・同和教育は幼い時から学校で学んでいるので、成長と共に理解
が深まっていると思います。自分の言動が差別や偏見になっていないか振り返る機会になったと思います。